

年頭の御挨拶

全曹青会長 桜井孝順



第 36 号

発行所

全国曹洞宗青年会

〒105 東京都港区芝

2-5-2 曹洞宗宗務庁内

編集 全国曹洞宗青年会

発行 全国曹洞宗青年会

TEL. 03-454-5411代



桂林の朝

謹んで新春の御祝詞を申し上げます。輝く昭和六十年は国連の提唱する「国際青年の年」であり青年宗侶として国家安泰・万民富楽ならんことを願いつつ、新たな決意で教化に励まれることを祈念致します。

全国曹洞宗青年会は、結成以来十年の歩みで、大衆教化の接点を求めての「スローガン」を掲げ、多くの方々の御支援を賜り、明日の宗門の活性化の一翼をなしてまいりました。各界からも多くの御意見をいただきましたことは、全て、青年宗侶の積極的な取り組みへの叱咤激励であると感謝申し上げます。次第であります。

私達人間にとって、人生八十年、この一生は、幸せを求め、生きがいを探し、弛まぬ努力の連続であります。良き人生、いい人間関係を求めて、国家にあつても、地域にあつても模索している時、大衆から見た宗侶の姿勢、寺院のあり方いかにと、問質してみるべき時がやってきているはずであります。

す。宗務庁より出版された「宗教集団の明日への課題」を拝読させていただく中、二十一世紀へ宗教的ニーズを継走すべき、宗侶の使命は、大衆にむかつて積極的に本証妙修の心をアピールし、眼前の目的手段だけに生きる人々へ、生涯の設計シナリオ作りの手助けとなるべき、リーダーシップの開発と共に、境内地への行政改革の導入に、いかに対処すべきかも考察をすべきであると思ひます。

全曹青においても、単位曹青におかれても、会員拡大がなされ、テーマを設定しての研修が積み重ねる発展期でありましたが、岐路に立った今、何を目標に指針を示すか大切な時であります。アフリカの餓鬼地獄の様子、アマゾン原生林の乱伐等、地球上にあつて、人間の知慧や、能力では防ぎようもない大自然の様に、今こそ、御開山の御垂示であります「杓底一残水」のお言葉を踏まえ、大自然との共存、物の大切さを訴えてまいらなければならぬと思ひます。

緑花・花いっぱい運動を展開するなど、信仰の上に現代人のニーズに応えるべき姿を再現すべき努力をなしてまいりたいものです。竹箒で清められた境内に、子供が笑顔で遊ぶ姿を願いつつ、年頭の所感と致します。

破草鞋

デパートのギャラリに再現されたふるさとの野や山。野辺にすすぎが覆い、木立から枯葉が舞う。全国から集った百三十余体の石仏は、都会の路傍に二週間鎮座をされた。

ここを訪ねた人々は、人工の野原を散策しつつ、微笑みかける野の石仏たちに出会う。年老いた夫婦、ふるさとを偲ぶ人、石仏のマニア。多くの若者も一語に野を廻った。そして誰もが、野の仏たちに掌を合わす。周りの人に気付かうことなく、自然に……。

石仏と向かい合い、無言の語らいをする都会の人たちに、野仏は心の安らぎを与えてくれた。風雪に耐える尊さを示してくれた。

珍しい石仏を一堂に集めたことよりも、多くの人々に掌を合わせ心と呼び戻し、宗教心を養ってくれたことに、この石仏展の意義は大きい。

しかし、野仏が留守になった地方では、仏さまの都会暮らしを気付かない年々、「石仏は道端、村中であつて拝まれてこそ生きるもの、自ら足を運び、草の匂いと共に野仏を野で拝む、無理のない姿こそ美しい」の声も大切にしたい。(Y)

《指針》

道は無窮

愛知専門尼僧堂堂長

青山 俊 董



終りなき 旅にしあれば

今この

一息の歩み

いとしみゆかん

これは今年のお勅題「旅」にちなんで、ふとできた歌である。「終りなき旅」というのは終着駅なし、卒業なしの無限の求道の旅、修行の旅というほどの意味である。永遠の仏の御命と同じ命をいただいての歩み、という思いも含んでいるが。

永遠とか、無限というときとく姿勢が前のめりになってしまふ。どうにもならない過去ばかりを振り返り、背負いこんでも仕方がないし、今ここがおもしろくない、大変だからといって、キョロキョロと助け物語みたいに未来に前のめりになってはいけない。永遠という、無限という息の長さとともに、その裏打ちとなる姿勢は、今この一歩を大切に生きるというのでなければならぬ。今この

一息の歩み」を疑視し、大切に生きてこそ、かがやかしい明日がやってくるのである。

過去がどんなにすばらしくても、今が駄目なら駄目なのであり、過去がどんなにつまらなくても、今がよければよいのである。どんな過去であろうと、それを生かすも殺すも、一つに今この生きざまにかかっているのであり、今この生きざま一つで開かれた明日が開ざされもすれば、閉ざされた道が大きく開かれもするのである。言葉をかえて云うなれば、終着駅、目的地は今この一歩なのである。「かたつむり どこで死んでも家の中」という句のあったことを記憶しているが、終着駅なし、卒業なしという無限の息の長さの裏打ちは、今この一歩一歩を終着駅として歩むということなのである。

「次」に心しておきたいことは、「今この一息の歩み いとしみゆかん」の、「この「いとむ」ということである。ほんとうに自分をいとしむ、かわいがるということはどういうことか。気まぐれな凡夫の私の思いを満足させることではないことは、云うまでもない。私の思いはいかがあるかと、今この一歩を道にしたがいが、教えにしたがって生きることが、ほんとうに自分をいとおしむ生き方であることを忘れてはならない。

ここで又心せねばならないことは、この法のいただき方道のいただき方である。「これこそ間違いない教え」「これこそ正しい法」と間違っと思ひこんでいたら一大事だからである。東京へ行く電車と思ひこんで京都市行きに乗っているようなもので、とり返しのつかないことになってしまう。法のいただき方、教えのいただき方というのは、「私の考えは間違っていないか」「私の理解の仕方は正しいか」といいたくのではなくし

「間違っていないか」「正しかった」といういただき方をしたとき、そこがすでに終着駅であり、そこで進歩は止まり、そこから生まれてくるものは傲慢な自信しかない。「間違っていたな」「足りなかったな」「浅かったな」といういただき方からは、さらに求める心が起き、無限に深まり、高まり、眼が澄んでくるほどに、一層どうしようもない自分が見え、法とは遙かに遠い自分が見え、見えるほどに求道の心が強まり……。終着駅なし、卒業なしの無限の求道の姿勢は、こういうものの考え方、受けとめ方が根底にあって、始めて生まれ

てくるものであろう。「よく生きる」とは、今はよくないと気がつくことだ」ととされた古人の言葉が思いあわされる。

この辺の消息を道元禅師は「身心に法いまだ参飽せざるには、法すでにたれりとおぼゆ。法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらずとおぼゆるなり」(『正法眼蔵・現成公案』)

とおっしゃり、又「道無窮」とお示めしにいられたのであろう。「身心に真実の教えが十分に会得できていない、つまりわかっているうちは、本人の自覚としてはもう十分わかったつもりになっていて、求めようという心が起きて来ない。反対に、求めつくして真実の教えが身心に十分に満ち満ちているとき、かえって本人の自覚としては、まだ足りないという思いのみがあつて、謙虚に一層求めようという思いが起きるものである。」というほどの意味になるか。このところを余語老師は「無限に食欲がおきるといふような求道のあり方でなければならぬ」とおっしゃっておられる。

良寛さまの歌に、

いかにして
まことの道に かなわなん
千年(ちとせ)のなかの
一日なりとも

というのがある。良寛さまの自分を疑視する目がかに澄み、良寛さまを照らしたもう仏の光が、いかにあきらかであるかを示しているような気がする。捨て果ててきた良寛さまにしてこの歌があり、いや、良寛さまだからこそ、この歌があるのかもしれない。

〔長野県塩尻市片丘五九二六 無量寺住職〕

地方集会 地域性を生かし盛大に研修



大衆から見た僧侶

(愛媛県・今治市)

四国四県に連なる山波の紅葉も終盤を迎えた去る十一月十日・十一日の両日、一昨年十一月十九日に発起結成された四国地区曹洞宗青年会の第一回大会が愛媛県今治市において開催された。

四国地区曹洞宗青年会も本年結成された徳島曹青が加わり、四国三曹青が一丸となり四国地区曹青会長。高鳴武彦師を実行委員長に今回の今治大会を企画した。今治市内の寺院での開催を切望していたところ、第一教区教区長、海頭広文老師のご好意により「大雄寺」様に会場をおひき受け頂くことができた。

本大会は、「脚下照顧」をスローガンにかかげ、佐々木宏幹先生、越智廓明老師に御講演をお願いした。



第一日目は、午後二時の開会にはじまり、佐々木宏幹先生による「大衆から見た僧侶」と題する講演が参加者の関心をひいた。新居

濱瑞応寺僧堂からも多数の青年修行僧の聴講もありより一層もり上りをみせた。

第一日目の予定行事を終え、会場を鈍川温泉へ移し懇親会の和やかな一時を過ごした。

第二日目は、再び大雄寺へ会場を戻し午前九時より、大雄寺御住職の越智廓明老師より「宗教法人

の経理」の講演を頂き名残りおしくも参加人員四十数名の第一回四国地区曹洞宗青年会今治大会は幕を閉じた。

最後に、会場主の海頭広文老師をはじめ高木四国管区老師、栗田



見なおそう!

正しい日本語

(千葉県・千葉市)

第八回関東地方集会(千葉大会)が、十一月二日から三日の一泊二日の予定で、千葉市の海蔵寺様を会場として、開催されました。今大会のメインテーマは、「見なおそう!正しい日本語・話し方」で、

「仏教的文字構造論」をお話しいただきました。非常にわかりやすく、歴史的にご説明をいただき、我々にとって最も身近な漢字に対して、尚さらの興味を覚えました。

大会会長 吉村明仁、実行委員長 伊藤博陽、両師を中心として、関東地区の多数の会員の出席のもとに修行されました。

記念写真、薬石の後、「地域青年会活動の現況報告」として、関東地区、とくに茨城、千葉、群馬の三県から、日常活動の報告がありました。

第一日目は、午後一時打ち出し、本尊上供、所長老師、宗議会議員老師の暖かい御祝辞の後、書家の浅見錦龍先生の講演がありました。

茨城においては、「緑陰禅の集い」をメイン行事とし、三部門委員会にわけて、日常活動を行なっています。一つは、研修委員会で、二ヶ月に一回、祖録をひもとく輪読会をしています。二つ目は、法式委員会です。一ヶ月に一回以上



会を開き、法要差定の勉強をし、将来には、本にまとめようとしています。三つ目は、広報委員会です。年に三回、新聞を発行し、年度に一回会報の発行をおこなっています。外にも、年末托鉢などの活動をおこなっています。

又、千葉県においては、僧俗を混えた、摂心会を一週間にわたり修行し、緑蔭禅とはまた一味違った行持をしています。

一番注目をされたのが、群馬県のやりかたでした。緑蔭禅はもちろんですが、その他に毎年チャリティーショーを開催しています。芸能人をよんでのショーですが、独特の方法だと思えます。

第二日目は、六時振鈴、暁天、朝課、小食のあと、講談師宝井琴鶴師匠より「お話の仕方」(間の取

り方)の講演がありました。講談師としての修業の話や、講談の実演をまじえながらの、見事な間のとおり方、話の中のことばの選び方など、布教、布教といながら、なかなか話すことに逡巡している我々に、プロとしての並々ならぬ日常の心構えを教えていただきました。

また今大会で特筆されなければならないのは、記念誌の発行であるろうかと思えます。

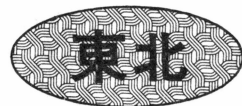
「難読、難字あれこれ」と題して、第一章、読み誤りやすい漢字、第二章、書き誤りやすい漢字の用法、第三章、動物名、植物名、外来語地名、都市名、食物名、第四章、新旧比較対照の四章にわけられた百ページにわたる労作です。

二年間にわたり、辞書と格闘をしながらの勉強の跡がしのげられ、頭の下がる思いがします。

最後に、千葉曹書会長の吉村明仁師が、全曹書十周年記念出版「緑蔭説法」の中から松原泰道老師のことばをあげていました。

坊さんほど、勉強しないグループはないとおもいます。私どもが問題を考え、接点を求める前に、私達は自分を省みなければなりません。

私達若い僧が一般の人々に対して説教をするよりも、彼らからよ



り多く何かを学んでいるという気がでてまいりますと、自ずと出てきます。

このような謙虚な気持ちを忘れないことが、青年宗侶の原点であり、また青年会活動であると、この地方集會に参加をして感じまし

たましいとのであい パート2 (岩手県・西根町)

た。この様なすばらしい大会を無事円成させた千葉曹書各位、千葉県曹洞宗寺院各位の御苦勞に感謝し、尚一層の会員の親睦と会活動、会員各位の健康を祈念しつつ私の報告とします。

東北六県の八加盟曹洞宗青年会を一巡した東北地方集會は、第九回を迎え、岩手県曹洞宗青年会(菊池裕光会長)の主管で、去る十一月一日・二日の両日、岩手県西根町の「いこいの村岩手」で全施設貸し切りで開催された。

第一日目を東北曹書杯争奪ソフトボール大会としたが、あいにくの雨のため、室内ゲームに切り替えられ、各県共代表選手を出して各ゲームに挑戦し熱戦を繰り広げた。

午後5時、全国曹洞宗青年会校井孝順会長、和田謙寿講師の到着を待って記念写真、続いて東北曹書恒例の親睦レセプションが行な

われ、ゲーム大会の表彰式もあわせ行なわれて、各県より参加した百余名の会員は夜を徹して親睦を深めた。

大会第二日目は、メインとなる東北地方集會「岩手大会」午前八時三十分、多目的ホールにおいて開会法要、続いて柳引章三東北地区曹洞宗青年会連絡協議会会長の挨拶、菊池岩手曹書会長が歓迎の挨拶をし、全員に南部鉄器がお土産として配られた。

東北地方集會は、まず活動事例発表がおこなわれた。第一は、全国の注目を集めている岩手県曹洞宗女子青年会の事例報告。現在四〇名余の会員を持つに至った女子

—ご寺院の豊かな明日をクリエイトする—

私達の仕事は 寺院運営企画・建築・設計・営繕工事
境内・墓地清掃保守管理施工
寺院用品/焼却炉など環境用品販売

●あらゆる相談をお待ちしております!
見積無料 ☎(364)0671~3
法律・会計相談も行っております。

—日本寺院株式会社—

〒160 東京都新宿区百人町1-13-2

青年会結成のプロセス、今後の展望について、本田ゆみ会長が発表。席上、門脇允元顧問が活動資金を寄金されるなど参加者一同の暖かい支援を受けた。

今大会に於いても準備などから岩手曹青とともに活躍、全国初の女子青年会は順調な活動をみせている。

活動事例発表の第二は、桜井曹青会長による全曹青十周年記念事業の事業報告であった。素晴らしい企画のもとに実施された「石仏展」「洋上セミナー」「講演録出版」などの概要を報告し東北の協力態勢に謝意を表した。

会場にて即売された講演録「緑陰説法」は東北地方集会での講演も収録されており、参加者の好評をえて、当日用意された百冊は殆ど売りつくした。続いて曹洞宗ボランティア会の活動報告が、宮城曹青によって発表された。

大会は、次期開催地の決定にはいり、三国典昭東北曹青事務局員より「宮城県」と発表され、実行委員長緒子が岩手曹青菊池会長より宮城曹青阿部豊亭会長にかけられ、阿部会長は「十回の記念すべき大会を宮城で引き受ける」ことを宣言した。

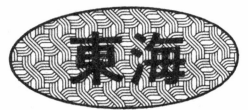


催された第一回大会の続編ともいえるもの。各県曹青からは地方に残る葬送儀礼のうち特に「葬列について」二〇の資料発表があり、同じ東北の中でも、いろいろなパターンがあり貴重な資料となった。

大会の最後は記念講演。仏教民俗の立場から駒大教授の和田謙寿先生が「たまししいの復活」と題して講演をされ、大会を更に意義あるものとした。

こうして輝き実績を遺して、今回もまた東南集会は盛会裡に幕を閉じた。

折しも岩手山おろしの白雪が舞う中を、各県からの参加者は宮城での再会を約束して帰途についてた。



まずは親睦 競技会から

(愛知県・犬山市)

去る十一月十五日・十六日、愛知県犬山市に於て東海曹青(会長小原智司)の第八回大会を開催いたしました。

東海曹青は愛知、岐阜、三重、静岡の六曹青で構成し大きな会(一般参加の会)と小さな会(会員の研修を中心とした会)を隔年で催しております。今回は小大会でしたが、愛知第一曹青(会長岡島博司)の担当で開き、有意義な会となりました。以下、会の様子をご報告いたします。

小大会のメインに各曹青対抗のソフトボールがあります。親睦を深める為に始まった競技ですが年々、熱を帯び、名勝負まで生れますと意気込みも違ってきました。この日に合せて研鑽を積むチームも少なくありません。

さて当日。

「今年こそは。」と集合したのですが、あいにくの雨。一部に思わぬ風雷神に合掌した老兵も見られた。…とのことですが、気を取り

直してボーリング大会に変更。百二十名に及ぶ大競技は集計のたびに優勝カップも右往左往し爆笑をさそいましたが結局本命愛知第三曹青に落ち着き、個人は「プロ」と称された「愛一曹青上野徳充君」となりました。二時間半に及ぶ熱戦も和気あいあいのうちに幕となり、次回への期待ばかり高まる競技会でした。

夕刻よりの宿泊研修では講師に水野博隆老師(愛知県岩倉市宝泉寺住職)を依頼し、「道元禪師の政治と宗教」と題して講演いただきました。とかく相反しがちな問題ですが、宗祖を語るに時代背景も重要な点です。時代の見方、宗教のあり方と続きましたが、疎外されがちな宗教と渴望する民衆の存在など、私達の使命を感じさせられました。又、講師が教育委員長に就かれていることから祭政不一致の現況も伺いました。一同理解しながらやりきれぬ思いもしました。

輪島塗製造直販売

佛具・記念品・御膳・御椀・御重・盆・箸 他
漆器修理致します。

大本山御用達 鈴木長寿堂

〒928 石川県輪島市鳳至町鳳至丁79番地
TEL 0768-22-0561

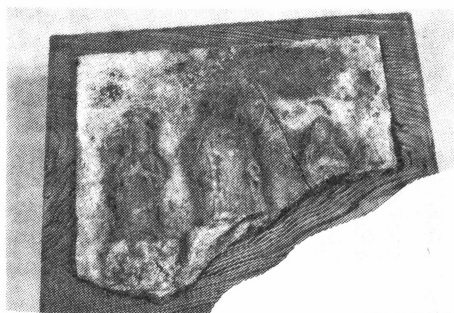
ほほえみの石仏

私たち全曹青はこの十年間、「大衆教化の接点を求めて」をメイン・テーマと定め、青年僧ならではの活動を積み重ねてきた。特に今回、そのテーマをより広く、深く掘り下げ、より大衆的な接点を求めて、南は鹿児島県の田の神さまから北は佐渡、福島野の仏さまに至るまで、全国各地から野仏170体を一堂に集めて展覧する「ほほえみの石仏展—この愛らしき野の仏たち—」を、去る10月12日(金)~24日(水)まで、東京・新宿の小田急デパートを会場に開催した。慈悲に満ち、永遠の微笑みをたたえた石仏群像のいくつかを誌上公開してみよう。



◀双体田の神像
〈鹿児島県〉

田の神は原則的には単体像であるが、川内市には何体か双体浮彫像がある。



◀阿弥陀三尊
〈福井県〉

脇侍の心持ち腰をひねったあたりがなかなかの出来栄え。



◀五百体石仏群
〈京都市〉

清水寺の成就院に向かう樹林の陰の丘陵に置かれてある。像高〇、六メートルから〇、八メートルの花崗岩に彫られ、室町時代のものがほとんどである。

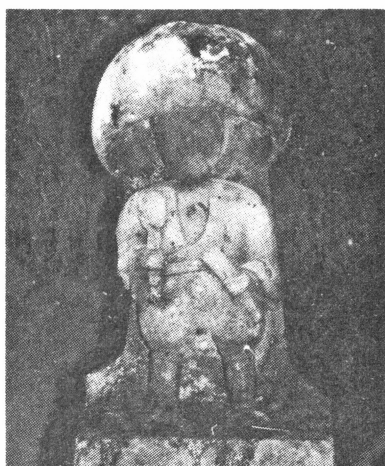


↑修那羅の鬼〈長野県〉

修那羅山を開いた大天武は、山岳修験の徒であったので、鬼神を配下においた。仁王のように筋骨隆々たるものも特色の一つ。

◀聖観音〈福井県〉

苔が大変美しい。頭上に化仏を戴いた聖観音で六臂像である。



↑田の神〈鹿児島県〉

大きな釜でも冠ったようなこの田の神はちょっと異様である。右手にメシゲ、左手はすりこぎかと思われる。



ほほえみの石仏たち



↑白滝観音小石仏

〈広島県〉

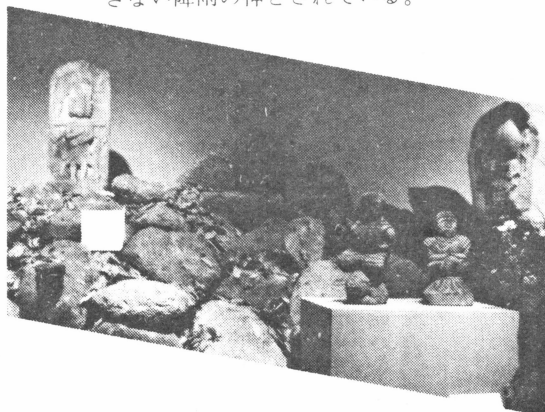
瀬戸内海の島々の風景を眼下にする白滝山の石仏群の一つ。あご鬚の老人風は羅漢であろうか。

↓山の神(上) 〈熊本県〉

裾が蓮華状になって、冠り物・服装ともに中国風である。

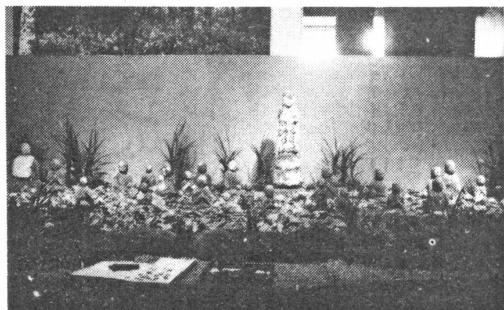
八大竜王(右下)

蛙に乗り、稲作に欠くことのできない降雨の神とされている。



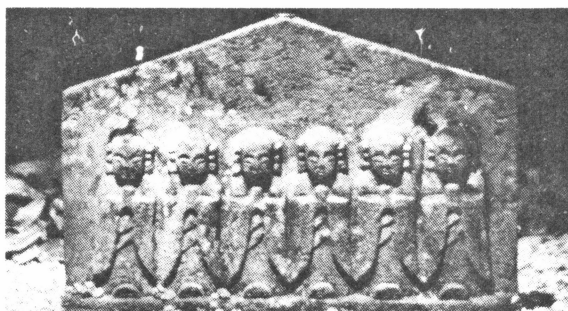
↑馬頭観音〈群馬県〉

八臂像で、左上手は宝輪、中手は宝棒、下手は羅索、右上手は不明、中手は斧、下手は与願印に見える。すり鉢状の中に、蓮台に坐して納まっている。



↑延命地藏と小地藏群〈新潟県〉

佐渡の石仏の特色は、こけし風の小地藏群にあり、一種の報賽用の地藏である。



↑六地藏〈山梨県〉

丁重に台座を設けたものであるが、台座のある六地藏は少ない。小さいながらもていねいに彫りこんである。

→子安観音

〈神奈川県〉

がっちりした台座の上に、少女風の美しい如意輪観音が、赤ん坊に乳をふくませている。



この愛、野の仏に

“ほほえみの石仏展” を終えて

実行委員長 松倉 紘洋

全国曹洞宗青年会（全曹青）結成十周年記念事業の中でもメイン行事であった“ほほえみの石佛展”も多くの方々の好意にささえられ、盛大裡に終えることが出来ました。

今、石佛展を終えて、その感激の余韻にひたっておりますが、思い出すままに石佛展をふり返って見たいと思います。

今回、石佛展の開催が決定されて見て、あらためて、私共が普段石佛に対して無頓着であったことか、これはご指導いただいた大護先生も内心驚かれたに相違ない。大護先生、藤井先生等で選んでいただいた石佛の中でも更に目玉となるものが必要であり、特に“ほほえみの石佛”という表題にぴったりの石佛を先ず了解を得ることが必要であった。

そしてその白羽の矢が鹿児島島の田の神さまに当たった次第。鹿児島県の富永元会員に連絡し、ほん

とかな？ そうだとの返事をいただいて、南師と東京を発つたのが、七月四日、一便でした。富永師の案内で始良町の教育委員会、文化財保護委員等、多数の方々との話し合いましたが、やはり田の神信仰がさかんな土地柄、大変慎重論が多く、特にポスター等に使用された田の神さまは、以前紛失したことがあり、動かすと悪いことが起きるのでは……。との心配から、ご返事をいただくのに時間がかかったが、最終的に文化財保護委員の方々も一生懸命になって下さり、了解いただいた。富永師のご助力に感謝申し上げます。

熊本県荒尾市の山の神、大分県直入町の山神、は大護先生の特別のご推選の石佛でしたが、双方とも、宗門関係の寺院が全くない場所、色々苦心の末、了解を得たものです。特に荒尾市の山の神さまをおもりにしている八十四才の尾上さんを

中心とした方々には、その山の神に対する、信仰と愛着心には生きている石佛信仰を目的あたりに見た思いでした。いよ／＼東京に運び出す時はオイ／＼と泣いて、立ち合った九州理事の久賀師もさすが「まいりましたケン」。との報告をいただいた。

藤井弘子先生と初めてお会いした因島の白滝山の石佛群にはいささかその規模の大きさに驚かされたものでした。

今回、石佛展の開催で気がついたことは、五百体の羅漢さまをおまつりしているお寺が意外に多いことでした。五百体の表現に一定のものがなく、作者の表現が割合自由に表わされることにあるのかも知れない。

とにかく、海拔三百メートルに満たない山の中腹からの参道に羅漢さまが配され、頂上にはお釈迦さま、脇侍、十大弟子、十六羅漢、五百羅漢、更に達磨大師、高祖さ

ま、阿弥陀さま等々、六百有余と思われる石佛群に思わず感嘆の声をあげたものでした。

永平寺と一乗谷の石佛については、永平寺に安居された方も、石佛に心とどめた方は少なかつたでしょう。しかし、今回出展された石佛の勿谷石の色の美しさと彫りの素晴らしさに歩をとどめた方も多かつた。永平寺に新しい魅力が見出せたこと云々で良いのではないのでしょうか。



観賞する入場者

一乗谷は数奇な運命を歩んだところですが、特に今回は西田保氏所蔵の子供の夢のおつげで発掘された、未だ内外不出の金泊の石佛でこの出展には知る人を驚かせたものです。市教育委員会等、関係の方に依頼した所、絶対不可能でしょう。未だ一度も出展されてませんと、交渉にすら立ち合っていないだけなかつたが、縁というもので

した。いよゝ運搬という時、大海師共々業者の一人を案内して称光寺さまにまいりましたがお話している中に住職の故郷が私と同郷の愛媛県の曹洞宗のお生まれということでご因縁を喜んでいただけたのです。

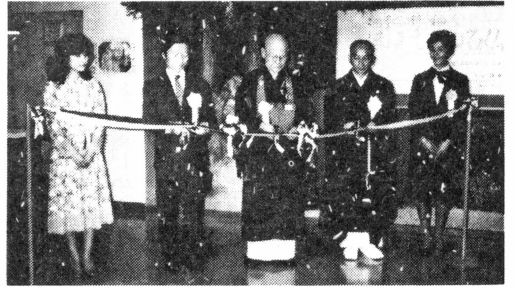
その他、修那羅山、群馬県内、東京等々、想い出は尽きませんが、こうして大きな障害となるような問題もなく了解いただけただけことはみ仏のご加護によるものと有難く感謝致したいものです。

さて、実際の運営面に際しては、膨大な費用捻出の為、両大本山、宗務庁そして都内寺院を中心としてご支援下さった多くの方々に深謝申し上げたい。

青年会が今まで多くの事業を企画実践してまいりましたが、総体的に言えることは、準備が後手後手に回り、常に準備に追いまわされてしまうことですが、今回もやはりその通りで、大いに反省しております。

今回は、読売新聞社、小田急百貨店の方々に、ずいぶん迷惑をかけましたが、それぞれ大変好意的に配慮して下さいました。

限られた人員で、大規模な催しを企画し、その中に色々と新しい試みを入れたりして、試行錯誤を繰り返しつつも結果的には、当初私どもが願っていた趣意が大いに



テープカット

宣揚出来、入場者総数が約五万人としてマスコミ関係はNHKのNC9時をはじめ日本テレビ(宗教の時間等)、TBS等、新聞関係も数社に渡りPR、あるいは報道下さった。

現代の混迷せる世相の中で、数百年の間、多ぜいの人に願いを込めて拝がまれ、そして慈愛に満ちた微笑を見せて下さったこの企画が各方面から高い評価を得たものと存じます。

今回の事業に際し、御協力頂いた各諸団体、そして、会員各位に万感の謝意を表し、今後共益々の発展を念じつつペンを置かせていただきます。

合掌

“ほほえみの石仏展”

によせて

野田 千尋

会場を一巡すると、図書で、すでにお目にかかって、なじみ深い作品に幾つか対面する。これらは優れた宗教芸術品のみで、鮮烈な造形感覚を持つている。

今まで見たこともない薩摩の田の石佛像がこんど始めて出品され、ポスターにまでなっているの、田の石佛像を取り上げて少し解説してみたい。

米に生き、米に死んで行く日本人であるから田の神信仰は全国的であることはいまでもないが、

南九州には約一千五百体の田の石像があつて、わが国における田の石佛像の唯一のふるさとである。天災と貧困にうちひしがれた貧しい薩摩の稲作農民たちは、その苦悩を忘れて生きていく一つの知恵として、身近かにあつた桜島や霧島山の凝灰岩で田の石佛像を刻み、顔にはほほえみをたたえて陽光に生きようとしたのであつた。

写真は、始良郡加治木町の指定文化財である。頭に甌鉢といわれるワラで編んだ米の蒸し器を冠り袂の短上衣に誇姿。たすきで腕高くたくしあげ、右手はのばしてシヤモジを持ち、左手はシキをおさえ、左足を踏み出し、右足は引かれた姿で、田の神講

乗って、満面にほほえみをたたえ、まさに田の神舞に踊り出ようとするポーズで、楽しい秋の豊作に満足したほほえみ顔の田の神舞姿こそは、稲作農民にとっては最高のものであり、こんどの石仏展のポスターになっている。

「ほほえみの石仏展」は、人間砂漠の中で、ともすれば自分を見失いがちな都会の人々に、素朴な姿でほほえんで優しく語りかけてくれる野仏に対し「ふるさと」を思い出してもらおう企画である。

東京小田急百貨店で開かれた「ほほえみの石仏展」は、我が国、民間信仰の一つの流れを知り、また日本の精神構造を分析するうえからも大いに意義があり、考えさせられるところの多い心打つ展示会である。文化庁、全国曹洞宗青年会、読売新聞社に心から厚く御礼申し上げる次第である。

(鹿児島県鹿屋市

文化財保護審議会会長)



石仏「田の神」

祭りの酒興に

全国曹洞宗青年会結成十周年記念事業決算報告

(洋上セミナー)

(微笑仏展)

収入の部

項 目	決 算 額	備 考
1 参加者会費	10,961,500	205名
2 本部補助金	500,000	
合 計	11,461,500	

支出の部

項 目	金 額	備 考
1 東急観光支払い	10,376,360	
2 記念写真代	123,000	
3 講師謝礼	350,000	
4 事務費	79,210	
5 Tシャツ代	203,200	
6 講師旅費	70,000	
7 運営費	220,000	スタッフ謝礼 アシスタント謝礼等
8 雑費	35,000	写真代等
合 計	11,456,770	

収入合計 11,461,500円

支出合計 11,456,770円

差 引 4,730円

(講 演 録)

収入の部

★経過報告

売上金 1,063,500円

(59.12.20現在)

支出の部

項 目	金 額	備 考
1 編集費	620,000	パンタカ
2 発行費	2,129,700	@709円90銭
3 謝 礼	80,000	執筆者校正
4 テープおこし謝礼	50,000	教化研修所員
合 計	2,879,700	

収入の部

項 目	決 算 額	備 考
1 宗務庁助成金	3,000,000	
2 特別助成金	6,750,000	
3 入場券収入	9,016,500	
4 図書販売収入	9,571,200	
5 広告収入	1,750,000	
6 物品販売収入	2,946,920	
7 十周年式典会費	470,000	
8 十周年式典祝賀	1,103,000	
9 さい銭収入	528,676	
10 雑 収 入	465,900	呈茶収益他
合 計	35,602,196	

支出の部

項 目	金 額	備 考
1 会場設営費	10,096,000	ポスター、入場券、広告料含む
2 図録作成費	12,000,000	編集、企画印刷代
3 出展謝礼	2,337,350	特別運送料 灯明料含む
4 会議費	1,172,959	旅費も含む
5 人件費	632,000	アルバイト員代
6 物品作成費	4,447,180	絵ハガキ 田の神パネル等
7 式典費	1,963,551	レセプション
8 記念品代	1,697,000	
9 諸雑費	1,237,675	事務用品等
合 計	35,583,715	

収入合計 35,602,196円

支出合計 35,583,715円

差 引 18,481円

「禪のつどい」後期中央研修会

セミナーを東西に分散 開催日時決定

昭和五十八年度は、後期禪のつどい中央研修会を地方の三会場で分散開催し、「食」の問題を提起して研修しましたが、好評裡にセミナーを終えることが出来ました。

本年度は再び、東日本と西日本の二会場で分散して開催いたします。

会場は次の通り、

▼東日本会場
三月七・八日 1時受付
神奈川（ホテル・おかだ）
〈神奈川県箱根湯本温泉〉

テーマ
「アフターケアとしての
カウンセリング」

講師 余語翠巖老師
篠原英寿先生

現在、家族の楽しいコミュニ
ケーションの場としての「食卓」

参加費 三、〇〇〇円
参加人数 一〇〇名

講師 阿部圭佑老師
滝 孝道老師
仲秋喜道老師

▼西日本会場
一月三〇日・三十一日 12時受付
福岡（明光寺）
福岡市博多区吉塚三丁目

テーマ
「食事を見なおそう」

参加費 一〇、〇〇〇円
参加人数 一〇〇名

乾 雅宏先生

が失なわれ、おとな不在の朝食や夕食によって、子どもたちの心と身体がむしばまれようとしています。このことを取り上げたNHK特集「子どもたちの食卓」は大反響を呼び起しました。

家族との対話、子供との語らいの欠如がまねく家庭の崩壊、孤独であるといわれる現代の子の悩みとは何なのでしょうか。

本年度も「食」を主軸テーマに、各会場とも地方色を生かした研修会を行います。

各地区へは、追って連絡されますが、会員はもとより、多数の皆様にご参加くださるよう御案内申し上げます。

〈予告〉

宗教を現代に問う！

第七回中国地方集会 広島大会

●月日 2月26・27日

●会場 ホテル・金華園
(広島県尾道市)

●テーマ
シンポジウム

「仏教をいかす方法さぐる」

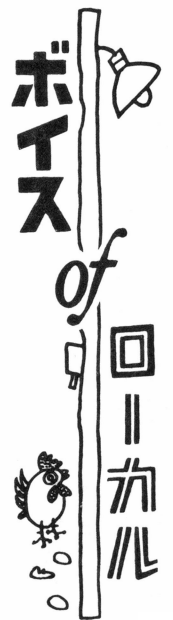
●講師

横山真佳氏
長田暎一氏

有馬実成師

横山正賢師

(各師交渉中)



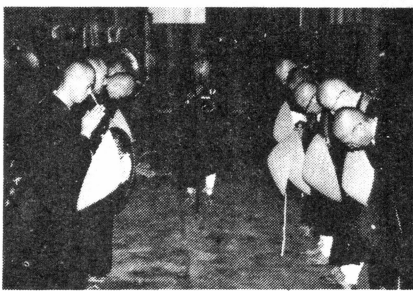
青年会らしき僧堂研修

新潟曹洞宗青年会

昨年の研修は、北信越の大会を兼ねた企画でしたが、今年度は、又、もとにもどって例年通りの二泊三日（11月19日～21日）の間、大栄寺僧堂を会場にして開催された。「聲山清規」を本講題として、大栄寺僧堂で、大本山永平寺後堂でもあられる、川口常光老師より全日程、文字通り手とり足とり御教導をいただき、僧堂生活を送る

ことができた貴重な研修会でありました。

まず法堂で開講式の後入堂の拝より始め、日課諷経、僧堂に於ける本飯台、講義、夜坐、僧堂内での打眠、暁天坐、行鉢、作務、提唱と大栄寺僧堂の規矩に従って参加者それぞれ当役につき、休憩時間はほとんど公務、差定の確認勉強にあてます。参加者の顔ぶれは僧堂経験の有る人も無い人もおりますので、雲衲の方にも班に入っていたいただき、文字通り、乳水の如く和合、してゆく姿勢が自ずとできていく事になります。正に大栄寺僧堂をあげて青年会員とともに研修できるという事が、大きな特色であると思います。特に僧堂での飯台は、浄人進退、展鉢作法、打槌から経文や疏の読み方（設備養もある）等実際に堂内で行ずる事ができるので雲衲の方々にとってたいへん良い事であるとの感想



総会日時決まる

5月8・9日

於 宗務庁研修道場

昭和60年度

も毎年聞かれます。それ以上に僧堂経験の無い人はもちろん、送行後なかなかこういった生活を送る事は難しいわけですから、一年一度の研修は有難い事なのです。二日目の午后からは托鉢が行なわれ、雨あがりの北風の中、素わらじで約二時間近郷を行乞し、帰ってから入れていただいたお風呂の温かさは言葉に表わすことができませぬ。三日目になると、ようやく単上の生活にも慣れて来ますが、もう日程は終了、閉会式乞暇の拝にて静かに散会してゆくわけです。

数多くの思い出が残ります。大梵鐘の小声とすべきところが中声くらいで打ってしまい、他の当役の方が大あわてしたり、木版三会のところを一通打ちしてしまったり。鳴らし物の失敗はいつの場合も目立つものですから皆印象が強いようです。懺謝こそありませ

募金福祉施設に届ける

九州曹洞宗青年会

五月十六、十七日の二日間におたつて行なわれた、梅花流全国奉詠大会に於いて、九州曹青は、九州にある宗門関係の福祉施設への募金活動を行なった。

九州曹青の新しい布教活動の一

んが、その事を何年経っても覚えていから不思議です。又、第一回から皆出席を続けておられる方は学校の先生をしておられ、僧堂安居経験の無い方でありませぬ。参加者の年令も二十代から四十代で安居経験の有る人も本山僧堂、地方僧堂と色々です。

又、講本は各年それぞれのものを用意しますが、別に「研修の葉」「僧堂研修進退作法拾集」一発行・新潟県曹洞宗青年会一がありませぬ。進退には写真説明を付け、各当役の差定が一目で対称して確認できる様に便宜をはかっています。青年会活動らしさを表わしたものと云えると思えます。

今回の参加者は三十人程でした。毎回感ずる事はこの企画は参加者の多少では無く一貫したテーマのもとに真剣な研修が持続しているという事にこそ意義があると思えます。

つとして行なったものであるが、二日間で三百余万円の募金を戴くことができた。

集まった募金を、大分県「みのり村」、佐賀県「長光園」、福岡県「老人ホーム」にそれぞれ均等に

寄付し、同じく曹洞宗ボランティア会へも、九州曹青理事会の承認と、先きの総会の承認を得て寄付をした。

「長生園」で送迎車購入

佐賀県神埼の長光園は、本年四月、重度身体障害者と精薄施設として新しく開園したもので、長興寺住職田口一樹師の発願によって為されたものである。

事務局だより

◎微笑仏展円成

昨年10月12日、24日までと、長い間、自坊の寺役もすべて休んで会場、及び宿泊所につめきりの会員の皆さんの姿は、正に捨て身の行でありました。全国で協力いただいた会員を始め、関係された方々の尽力とともに十周年記念のメイン事業としての面目これに過ぎるものは有りませぬ。色々な問題

今後の課題ももちろんクローズアップされましたが、前売り券当日券を合わせ四万八千余名来場という成果を見たことは、十年の歩みの新たな足跡となりました。入場券販売を初め出展交渉、企画等の力添え賜りました皆様は心から感謝申し上げます。尚、準備いたしました図録は、会場で完売するという誠に驚くべ

此の度、先に行なった梅花全国大会時の募金寄付で、当園は園生の病院等への送迎の為の車を購入した。車のボディに「九州曹洞宗青年会」と書かれた車は、今日も不自由な身体を乗せて走っている。園長の田口師は「九曹青の皆さんに、善意が生きて走っていることを知らせて欲しい」と話された。さ、やかに一隅を照し得たと思つて我々も嬉しい。

き結果となりました。品切れで御迷惑おかけしてしまつた方々にはおわび申し上げます。

◎講演録「緑蔭説法」

既に御承知の様に講演録が発行されました全国各地において青年会事業として講演いただいた中広い分野で活躍されておられる方々のお話をそのままにしました。各講師先生の生きざまを通じ、宗侶としてのあり方に対する指針として、又、教化活動の一助としてご利用いただける内容十分のものとして存じます。

●送料は宗務庁頒価送料
◎「檀信徒手帳」
多数お申し込みいただきました60年用の檀信徒手帳は、予定表的な性格を超え、仏教に対する関心が高まり、お寺とのかけはしとなる手帳であるとの声が寄せられる等、好評です。

◎事務局会務終盤

十周年という節目をむかえた当会の重要な時期の中で任に當つた事務局の仕事も、二月に行なわれる第七回禅文化学林、中国・天童寺拝登と桂林の旅、後期禅のつどい中央研修と終盤をむかえています。会務充実発展の為、御意見、提言をお寄せ下さい。

事務局日誌

- 10月12・24日 ほほえみの石仏展 (於・新宿小田急)
- 10月30日 特別事業委員会
- 10月25日・11月初旬 全国に石仏返還
- 11月1・2日 東北地方集會 (於・岩手)
- 11月2・3日 関東地方集會 (於・千葉)
- 11月10・11日 四国地方集會 (於・愛媛)
- 11月15・16日 東海地方集會 (於・愛知)
- 11月27日 本部事務局会
- 12月3日 理事会